

一九三三年  
(昭和八年)



六

(花山天文臺)

I—太陽と月 (天空の明暗)

日付	太陽		月			月の相
	日出 (星座)	日没	月齢	月出 (星座)	月没	
日	時分	時分	日	時分	時分	
1	4 44 (うし)	7 5	7.2	11 47 (し)	0 13	☉上弦 1日20時53分
6	4 43	7 8	12.2	17 33 (てんびん)	2 42	○満月 8日14時05分
11	4 42	7 11	17.2	22 35 (やぎ)	8 02	
16	4 42	7 13	22.2	0 27 (うを)	13 27	
21	4 43 (ふたご)	7 14	27.2	3 02 (うし)	18 20	☾下弦15日 8時26分
26	4 44	7 15	2.5	7 38 (かに)	21 48	●新月23日10時22分
(翌)	4 46	7 15	7.5	12 54 (をとめ)	23 54	

II—遊星界

**水星** 中旬以後は観望に好適である。来月1日には東に  $25^{\circ} 53'$  も離角し、日没より2時間も遅れて入る。又6日には北  $1^{\circ} 6'$ 、25日には南  $1^{\circ} 30'$  で月と合になるから望遠鏡でゆけなく見られるだらう。光度  $-0.8^m$  —  $+0.6^m$

**金星** 夕方の星、まだ小さい。光度  $-3.3^m$

**火星** 獅子座にあるが、木星に比して大變見おとりがする様になつた。其赤い色も吾々に恐怖の念をあたへず、むしろ美しい天のルビーとなつてしまつた。次回の接近は二年後の梅雨の時節で南極の巨大な極冠が吾々の目を射る事であらう。今年最も著しかった北半球(下)のアシダリウム海にも秋がおとづれてゐる事だらう。

**木星** 月の初め日がくると天頂近くに見られる。四月以來帯の模様は急速に變化しつつある。北半球の三條の帯のうち赤道に近い二條は段々幅廣くなり、一つの帯になるのではないかと思はれる。他の一條は一箇所切れた様になつた。10センチ級の望遠鏡でこれらは充分見られるであらう。光度  $-1.5$  等、視直径  $33.70$ 、5日には火星(南  $16'$ )と合になる。

**土星** いよいよ観望の好季となつた。12時には地平に現れる。光度はまだ0.7であるが輝星のない山羊座ではよく見立つてゐる。環の影が本體に投じて眞に美事な光景である。スケールは外輪の長半徑  $39.26$  短半徑  $10.41$  (日)本體の視直径  $16.20$

**天理** 9日9時;  $\alpha=1$ 時38.2分  $\delta=+9^{\circ}36'$  光度6.2

18日4時8分 南  $5^{\circ}11'$  で月と合

**海王星** 9日9時  $\alpha=10$ 時38.1分  $\delta=+9^{\circ}32'$  光度7.8

1日16時10分 北  $1^{\circ}27'$  で月と合

28日23時13分 北  $1^{\circ}44'$  で月と合

流星	下旬	アンドロメダ	附近	速痕
	月末	大熊座	附近	緩
	6—8月	ヘガス	附近	速痕
	6—8月	狐		速短
	6—8月	セフェ		

## 六月の夜の天空

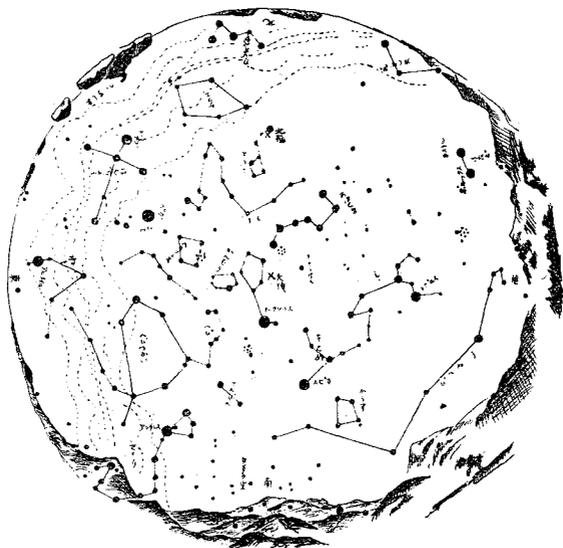
(恒星時 Sidereal Time 10時)

日本の中央部(京阪神地方)で

6月1日ならば午後9時. 15日ならば午後8時

東京は約15分早く、福岡は約20分遅く現はる

但し時刻は日本中央標準時.



### III—六月の星座

雨に濡れながらも若い芽はすくすくと日増にのびる。田には水が満ちすべてのものは濕氣を含んでみえる。

一しきり聞える蛙の鳴聲にふと目をあげるとき、決して目に入るものはベガと北の十字、東の空にほのじろく見える雲は天の河である。

冬の凜方強い北風にあふられながら、東の空低く見えた「さそり」が既に現れた。

春の星座をおしのける様に「さそり」や蛇、蛇遣ひ、それに棍棒をもつたヘルクレスが昇つてきた。素裸のまま夏の舞臺を作るのだらう。

北斗の西に傾くほど夏を思はせるものはない。ポインターが北にかくれカシオペヤのWもまだ低くアークツラスがゆつくりとなつかしそうちにまたよく夏の空を思ひ出させる。雨雲がはれたなら、春の星はいつしかめぐり去り、天一杯にちりばめられた夏の星々があるだらう。